

日本語離れなんて関係ない

日本語離れが進んでいると言われていたが、そんなことはない。日本語を学習する人は増え続けており、国際交流基金の調査によると 2012 年の学習者は前回 2009 年から 9.1% 増加して 398 万人に達した。中国での学習者が最も多く、その数は 100 万人を超える。近年ではインドネシアを筆頭に東南アジアでも日本語は人気である。最近のアニメや漫画の世界的ブームの影響も大きいだろう。

国際交流基金日本語試験センター主任の小長谷友香さんは、中国での駐在経験がある。中国の日本語学習者の多くは、大学で日本語を専攻する学生たちであり、彼らは日本語を学ぶことで自らの世界を広げようとしているという。

中国人留学生の Lu Gan さんは日本語を 3 年間学習し、現在も日本でアルバイト生活をしながら勉強している。日本は世界でも有数の高い識字率を誇る国だ。日本には未だ中国語に翻訳されていないたくさんの文学作品や映画、音楽がある。

「日本語を学んだことで、今では自分の力で直接に触れることができる。私の小さな世界はすこし大きくなった」Lu さんは、嬉しそうに言う。

海外のランゲージスクールでは、日本語の教室だけが他の教室とは違って整理整頓がきちんとされている。そう話すのは国際交流基金日本語試験センター事務局次長の原秀樹さんだ。日本では一つの部屋の中で生活することが多く、食事の時に足を折りたためるテーブルを使い、寝るときは箆笥から布団を取り出すなど昔から狭い空間を“片づける”ことで利用してきた。

「私は日本語を学ぶことで“お片づけ”の文化と一緒に輸出されているのではないかと思う」

これはあくまで一つの例にすぎないが、日本語を学ぶことでこうした小さな日本文化も感じとることができるのかもしれない。

中国の経済成長に伴い、中国語を学ぶ人が増えている。中国語を学ぶことを選択し、日本語は学ばないという状況が生まれることを懸念している人もいるのではないか。しかし、原さんは強く語る。

「ヨーロッパには何か国語も話すことができる人がたくさんいる。アジアでも今よりも多くの人がお互いの言語を話せることが当たり前になって欲しい」

[編集後記]

全く関係のなかったところに、電話をかけ取材をするという一連のことを初めて行いました。私の拙い取材の中でも、日本語学習を支援する人々の熱意を感じられました。これからの私自身の語学学習の在り方を考える機会にもなりました。

石川拓己